フィールド（現場）からの風 ㊳

宮田守男

働き方改革が地域に及ぼす影響を前向きに捉えよう

この時季、見慣れた景色の中に「こんな場所に桜の木があったのか」と気付かされることが多い。まだ鈍い色をした山の斜面や田畑の一角で、美しい花を咲かせて周囲から浮かび上がっている。花のつぼみが開き「花笑（わら）う」、と言い、花の「笑（え）み」と見上げる人々の「笑み」とが交わす微笑ましい光景に出会える好きな時季でもある。「散る桜・残る桜も・散る桜」は生きている限りは、いろいろな出会いを重ねて行くと、良寛が命の有限を詠んだ辞世とされる。また生け花は、完成の一歩前で止めて生けるとされている。生け終わった時に頂点だったら、後で来る人にとっては下り坂を見せる事になるとの意味がある。この完成一歩前のイメージを持つ生き方が大切なのかもしれない。

働き方改革関連法案が可決され、この4月から順次施行が始まった。残業時間の上限が定められ、これを超える残業が出来なくなり、使用者は労働者の希望を聴き、希望を踏まえて時季を指定、年5日の有給休暇を取得することが義務付けられた。また雇用形態に関わらない公正な待遇の確保が明確化された。

しかし現在もすでに大きな課題となっている労働力不足が、長時間労働への規制がかかることによって、より一層顕著になって行くのではと危惧している産業の現場、特に人手不足により長時間労働が常態化している観光産業の業種では、女性や高齢者に対する雇用は限界で、更なる淘汰が起きるのでは、との声が聞こえてくる。これまで非正規雇用労働者の賃金などによって人件費を調整していた労働現場でも、正規職員の待遇を抑制する事によって人件費を調整する可能性が考えられ、終身雇用が当たり前だった雇用市場が流動化し、優秀な人材を継続して確保していくのが難しい労働環境の時代への対応が急務だ。

政府は、4月に麻生財務相が、1万円札などの紙幣を20年ぶりに刷新、発表した。新紙幣のデザインは、1万円札は渋沢栄一氏、5千円札は津田梅子氏、千円札は北里柴三郎氏。渋沢栄一氏は、日本の近代産業を築いた著名人。渋沢さんの言葉とされる「四十、五十は、はなたれ小僧、六十、七十は働き盛り、九十になって迎えが来たら百まで待てと追い返せ」これからの大変な時代を示唆する新札デザインなのだろう。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

周辺に農地が残る八方地区、「完成一歩前」のイメージを持つ景観が大切になるのかもしれない